

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成27(2015)年
12月号
通巻544号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 平成27年12月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



伊太祁曾神社は紀州一宮、木の神様
岩出市の森脇聖淳さんと(前列右端)



名草山にある紀三井寺



藤白神社の大楠



道成寺



神島



湯浅醤油



梅酒メーカー中野酒造にて「あじさいの箱」和歌山
メンバー、左から永廣弘子さん、上地俊也さん、
小澤一美さん、2人おいて上地美晴さん

10月25～26日大倭会文化行事にて

高橋良美さん等撮影(報告記事 7頁)

法主矢追日聖の遺稿より

大倭大本宮伝承の紀 (三・最終回)

編集部

前回は聖武天皇と光明皇后の時代に関する法主様の御遺稿を紹介させて頂きました。この時代については、法主様だけでなく日妙師が記されたと思われる断片的な資料が多数あり、重複する部分も多いので、今回、少し整理しながら紹介していきたいと思えます。

ここで記録されていることは、歴史家の通説とは大きく異なる部分が少なくないのですが、あくまで日妙師が受けた霊示を法主様が記録されているということが基本ですので、その点を踏まえて読んで頂ければ幸いです。

須加谷寺について

大倭大本宮の地にかつて存在したという須加谷寺については前回でも言及されていましたが、もう少し詳しく記述されている資料がありますので、いくつかが引用させて頂きます。

昭和二五年八月二十八日

立教開宣、東光大祭の佳日

午前中は大雨、午後四時過ぎから雨上る。日妙師参詣さる。昨日

の約束で今日は大本宮の因縁の開顯さる日である。

大倭教、大本宮の神域。

須加谷寺址、別名、登美寺とも言ふ。

聖武天皇御創建。

現齋庭（注①）の処が寺院の中心であって舍利堂あり。塔式の建物にして互用ひず檜葺きの簡素なものである。堂は各地に散在しているが、中池の西方が規模広大な殿堂ありて、現中池（注②）が堂前の鏡池となっている。

この時代の墳墓は寺院の中或はその近くに造営したもので南北の山林地帯は墳墓群であるが、すべて須加谷寺に関連せるものである。

また、昭和二五年八月三十一日の日付で、法主様による次のような記述もあります。

この須加谷寺は聖武天皇が初めて舍利を供養された場所であり、寺の中心も舍利に置かれていた。斯うした鎮護国家、女人減罪の須加谷寺、大倭の和神の神示によってこの地を選びて建立された寺院なる故に、天皇屢々ここに車駕を進められて礼拝供養に詣られたものである。

須加谷寺の建設についての法主様の問いかけに対して、日妙師は昭和三十三年十月四日の日付のある資料の中で次のように答えられています。

須加谷寺八天平八年（※注 七三六年）頃コ、ニモケイノ用ニ（※注 模型の様に）初メテ建テラレタ。其レヨリ後二天平十三年（※注 七四一年）二国々二国分寺トシテ建テラレタ。

須加谷寺の正式な創建の年月日については「天平十三年九月二十八日創建」という記述もあります。

須加谷寺が建てられる以前のこの地（須加宮）に関しては、前述の昭和三十三年の資料の中で日妙師はこう答えられています。

注① 現奥津齋庭（拝殿後方）にあたる。

注② 昭和25年当時は、現鏡池が中池と呼ばれていた。

注③ 主語が省略になっているが、藤原不比等の娘である安宿媛（後の光明皇后）についての説明である。

注④ 日妙師が靈視により孝謙天皇の鈴と言われる青銅器の鈴が、縁あって大倭に保存されている（写真）。その経緯については平成15年3月号『おおやまと』（平成26年2月号で再録）で、法主様が語っておられる。

法主様はいつも客間のテーブルの下に置いておられ、時に鳴らすこともあったという。



注⑤

陶棺。陶器で作られた棺桶。法主様が庄山の実家に居られた当時、所有地だった熊取（現在田中裕彦さん宅の近く）で、法主様自身が発掘されたもので、今も大倭に保存されている（写真）。その経緯については法主様は、昭和43年5月号『すさのお』（平成22年5月号『おおやまと』で再録）で書いておられる。

須加宮八養老三年(※注 七一九年)頃二建テラレタ。御歳十二、三才ジブン、カラダガ弱カッタ為メ(注③)此ノ場所ヲエラビ、又其頃葉泉モワイテアリ此ニ宮ヲ建テラレタ。

施薬院八天平元年(※注 七二九年)十二月四日二初テ此ノ場所ノ葉セン(※注 泉)ヲ利用シテ建テラレタ。其後、悲田院ヲソバニ建設セラレタモノデアル。

同じ資料の中で、須加宮に関連して聖武天皇の娘の孝謙天皇についても述べられています。

孝謙天皇八皇后八須加宮ニセイヨーノ為ニタヘズ居ラレタカラ孝謙モ此ノ地ニコラレタ。又道鏡モ来ラレタコトモアル。ヨッテ天皇ノ鈴(注④)モ道鏡ノトールカン(注⑤)モ又此ニ納メラレタ。

これらの記事を参考にして奈良時代の須加谷寺の配置想像図(※4頁参照)とイメージ図(※5頁参照)を編集部で作成してみましたので御覧下さい。

草香媛や成謙坊について

次に、この須加谷寺と深いかかわりがあり、現在の齋庭や拝殿でも祀られている草香媛についても少なからず語られているので紹介していきたいと思えます。まず草香媛との出会いについて、昭和二十五年八月二十八日に、次のように記されています。

産神塚(注⑥)。齋庭のすぐ東に山の背を利用せる小さき円墳である。

かつて日聖、齋庭ぎは(※注 際)の齋田に於て車輪石の破片(注⑦)を拾ったことがあったので、この附近に高貴な方の墳墓あることが予測していた。

昭和二二年、大本宮をこの地に移すや齋庭でお祈りすればお姫様が時々現はれ、また妙月や鈴月もその姿を時々拝したと言っており、本年四月の暮れ、毎朝衣ズレの音がして日聖の居間に朝五時頃四、五日続けて来る。それによりて齋庭附近の山林を下刈して清掃させると、意外にもこの塚の存在を発見したのである。二八日こ

それによると、「何のかかわりがあるのかは知れないが、この棺からかつての怪僧、道鏡の姿が現われた」というのである。陶棺は本来この写真とは上下逆に納められているのだが、損傷があるのでこの形で撮影した。



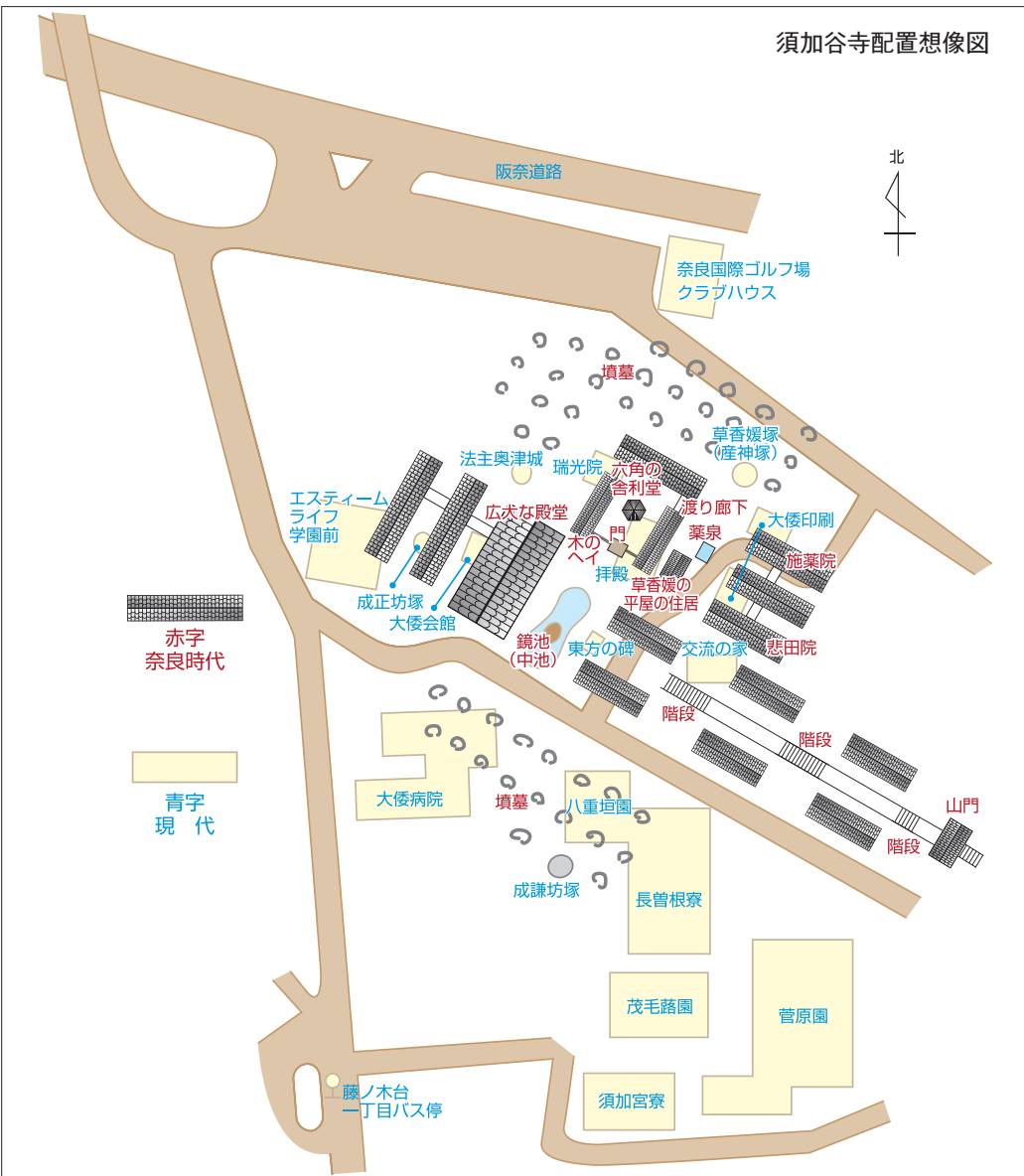
注⑥ 現齋庭の右奥に祀られている。

この文章の後に、法主様は当時の邑人の中に妊娠中に体調不良になったり、出産後赤子がすぐに他界したりした例があったことを書かれています。そして、そうしたことがどこから来るのか、日妙師を通して尋ねます。

こうした現象はこの姫の因縁から来るものならんと、その因縁を日妙に伺はしめられたれば、
 「草香媛は愛する男子ありて未だ婚して居ないが、既に妊娠し、子を持籠って（※注 身籠って）他界したまう」
 と簡単にお示しあり。聖武天皇は草香媛の為にこの須加谷寺を建立し、草香媛をこの寺に住せしめ給ふ。姫の住居地は中池の北方と宣ふ。

少しニュアンスは違いますが、三日後の八月三十一日には次のように書いています。

須加谷寺配置想像図



草香媛は二十七、八才頃、懐妊のままにて逝去されたので光明皇后はその様を誠に哀み、須加谷寺を菩提寺としてその境内に墓を築かれたものである。

そして、昭和三十三年十月四日の神示として驚くような事実が記されています。

草香媛ハ楊貴妃ノ子デアアル（注⑧）。成謙坊ハ草香媛ノ愛人デアッタ。

この成謙坊については次のような記事があります。

昭和三十年九月十四日 庄山にて、日妙の靈示

南方の塚（注⑨）

成謙坊道頼の墓

五十才過ぎのデッキリした顔付で骨格のガン健な体躯

先に草香媛が現はれてくる。

九月十五日 大倭神宮祭典

奈良朝から平安朝にかけて須加谷寺に関係ある諸霊が出現、色とりどりの大勢が集った美観に就て日妙は驚き、始めての勢揃いと言っていた。

成謙坊は生前、脳障害や手足不自由者に対して特に靈験著しく、行力特にすぐれた験者のようである。今日から改めて修行するから大倭の家子達も心得るようにと。

十二月四日 金鶏祭（地鎮祭） 大倭安宿苑

大倭大本宮にて、日妙靈示

成謙ハ天武ノ孫、舍人親王ノ子、淳仁ノ弟ナリ。

須加谷寺イメージ図



成^{じょうしやう}正坊^{しょうぼう}に関して、昭和二十五年八月二十八日の日付で次のように書かれています。

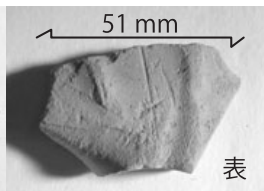
大本宮の北西の隅の畑の中に塚あり（注⑩）。この塚は、光仁天皇の皇子、成正坊成賢の墳墓と明示あり。成賢は豪者、謂ナマクサなるが故に仏道に入り、須加谷寺の住僧となる。

以上、法主様や日妙師が靈示を通して感じられた大倭大本宮の伝承を、遺された資料を通して紹介してきましたが、それらをどう受け取り、現在や未来に生かしていくかは、私達一人一人に投げかけられた課題だと思えます。そうしたことを考えるためのヒントとして、昭和四七年四月号の『すきのお』に法主様が書かれた「むすびの加美と黎明期の大倭」という文章を引用させて頂き、結びにします。

《福祉施設が大倭（紫陽花色）に誕生したことは事実ではあるが、然しそれは突発的に降って湧いたものではない。この原理はこの世の総てのことに通じるが、其れには必ずそれを生み出す前に其の要因がある。多くの人々は、目前に実在する影に目を見張って、それを生み出した前の実体には気がつかないようだ。大倭の福祉施設も例外ではない。現在当施設で勤務する職員の中にもそうした源流を知ろうともしないし、ただ世間並の職場であるような気持で可もなく不可もなしといった態度で勤務している人もあるかのように見受ける節がある。福祉施設の仕事に携わる者は、必ず住死者に対する慈善博愛の精神をその根底に堅持することを必須の条件としなければならない。

ここ大倭の地はもと須加宮^{すかみや}といい、聖武天皇の皇后であつた光明皇后（もと藤原安宿媛）の宮宅址で、皇后はここで初期の試みとして悲田院、施薬院を創設されたと伝えられてきた。言わば日本の社会福祉事業発祥の地となる。でもこの伝承の歴史的眞実性は論外として、私は斯うした伝承のある土地で皇后の精神を今の世に顕現することの重要性を痛感するものである。若し私が世間で見るとような観光誘致の目的で皇后の宮宅址や社会福祉事業発祥の地などと大々的に宣伝したと仮定すれば、私は恐らくとうの昔に此の世の人ではなかつた筈である。》

注⑦ 車輪石は、古墳副葬品にみられる古墳時代前期を中心として発達した腕輪形石製品で、碧玉岩製のものが多い。ここに記されている車輪石の断片（写真）は滑石製のものであるが、瑞光院で保存されていた法主様の考古遺物の中で発見され、去る平成27年10月20日に調査に来られた奈良市教育委員会埋蔵文化財センターの2人の研究員の方も、確かに車輪石の断片であると認められていた。ただし、奈良時代に車輪石が使用されたという事例はないので、古墳時代の墳墓の近くに草香媛の塚が造られたのではな



表

裏

車輪石イメージ図



いかと推測できる。

注⑧ 平成25年7月号『おおやまと』に再録された「大倭千一夜（其の六）」で、日妙師の靈視として法主様は、「草香媛のことにについては、光明皇后が簡単に語られた。唐王宮の事情によつて、当時、日本の留学生が楊貴妃からの依頼によつて連れ帰つたので、光明皇后は育て親となつてこの須加宮に住ませた」と書かれていますが、今回の御遺稿の中ではその記述は見つからなかつた。

注⑨ 大倭安宿苑守護靈の配所上方に現存する。

注⑩ 大倭会館正面左側の塚。側に拝所あり。

第328回大倭会文化行事報告

紀州に自然と人々を訪ねる

平成27年10月25～26日

南方熊楠について

大阪府枚方市 林 修 三

ああよかった。いい天気、いい景色、いい風と良い同行の方々には恵まれた旅でした。旅のあらましは表紙の写真と湯浅宗匠の名句に託して、私は特化した物事を語りたい。それは南方熊楠。知る人ぞ知る巨人である。

今回の旅では三つの熊楠に関する場所を訪れた。一つは彼の名前の由来と縁のある藤白神社である。残る二つの場所とは紀州田辺市の「南方熊楠顕彰館」と白浜の「南方熊楠記念館」。二つとも各々の趣きがありどちらも訪れてみる価値十分の心嬉しい場所だった。何よりも各々の館で、案内人の方に恵まれた。「顕彰館」での市役所の職員の方といい、「記念館」の館長さんといい、どちらも熊楠を心から敬愛し、好きでたまらないという方々でした。

巨人熊楠について語るスペースはこの稿にはとてもありませんが、只、親交のあった近代中国建国の父孫文の、明治三十四年二月二十日付、犬養毅宛の紹介文より抜粋し、その人柄の一端を想像していただきます。

「〔南方〕君は欧米に遊学すること二十年ならんとし、数国の語言文字に博通し、その哲学理学の精深なるは、泰西の専門名家といえども、つねに驚倒をなす。しかして植物学の専門の一門においてもつとも造詣をなせり。君は名利に心なく、志を学に苦しめ、独立し特り行くこと、十余年一日の〔こと〕し。まことに人の及ぶべきにあらざるなり」

旅の一日目、まず藤白神社、次に訪れたのが田辺市にある「南方熊楠旧邸」と隣接する「南方熊楠顕彰館」でした。顕彰館には熊楠の残した膨大な書物や日記、資料、論文などが収蔵されていて、熊楠研究の拠点ともいえるべき所でした。又熊楠邸は一九一六(大正五)年から一九四一(昭和十六)年、享年七十五歳で亡くなるまで熊楠が二十五年間を暮らした場所であり、又孤高の在野の科学者熊楠の研究所でもありました。彼が愛した植物類が生える庭が当時のままの姿で残されていたり、研究所として使用していた母屋が開放されて自由にみる事が出来ました。秋の一日、その母屋の縁側に腰かけ、彼が生活していた息使いを感じながら、机や顕微鏡が置かれていた書齋や庭をながめる幸福感に浸りました。(何となくうぜいたく)

実は私にとってこの熊楠邸を訪れるのは二度目のことでした。今から二十四年前、初めて私が大倭に来る事が出来た前々日、友、中健次郎と熊野を巡った最終目的地として、その頃まだ長女の文枝さんがお住まいになっていた熊楠邸を訪ねました。何のアポイントもなく、恐縮しながらも大胆に門を入り、玄関前の庭先にて熊楠に対する溢れる思いを小声で語りあっていた時、突然玄関の戸が開き、静かに文枝さんが出て来られました。思わず立ちつくす私達に、文枝さんは非礼をとがめる事もなく、あまつさえ優しくお声をかけて下さり、父君のことなどを少々お話し下さったのでした。今はなつかしい、ゆかしい思い出です。

二日目に白浜で、種々の熱帯植物に囲まれた番所山の上の、異空間的な「南方熊楠記念館」を訪ねました。館長さんの楽しい説明の最後には、屋上へとの案内されました。館長さんもめったになどと言われるほど見事に晴れ渡った空と海の田辺湾が一望出来て、熊楠が愛した神島が見えました。

この神島で、昭和四年六月一日、何の官職も持たない一平民である熊楠が、昭和天皇に植物学者としてご進講を行いました。昭和天皇南紀行幸に際し、天皇の強い希望で御召艦長門にて破格ともいえるべきこの出合いが実現しました。昭和初期という時代に点された一条の光のようです。

一枝もこころして吹け沖つ風
わが天皇のめでまし森ぞ (南方熊楠)

雨にけふる神島を見て紀伊の国の生みし (南方熊楠)

南方熊楠を思ふ (昭和天皇)

今しみじみとあの日を思い出す時、あの晴れ渡った青空は「タカマノハラオオカミ」からのプレゼントの様に思えます。最後に帰りのバスの中で杉本順一さんを通して届いた、南方熊楠からの大倭の皆様へのメッセージを認めて、この稿摺筆といたします。「ミナサマ ホウシユサマノオシエラ オヒロメクダサイ」

紀州十句

岡山県真庭市美甘 湯浅芳郎

伊太祁曾の社抱きて秋の山 (伊太祁曾神社)

紀三井寺石段の上に秋の雲

七五三幟はためく藤代社 (藤代神社)

草紅葉熊楠旧居に書の数多 (田辺 南方熊楠顕彰館)

秋の海納得地球の円きこと (白浜番所山 南方熊楠記念館)

秋深し釣鐘さがして道成寺

土産屋に釣鐘饅頭秋うらら (九絵鍋や一心に顔突き合わす 秋の旅バス一杯の土産物 旅の終りは寂しきものぞ秋夕日 (中村昇次氏のこと)

秋の海納得地球の円きこと

秋深し釣鐘さがして道成寺

土産屋に釣鐘饅頭秋うらら

九絵鍋や一心に顔突き合わす

秋の旅バス一杯の土産物

旅の終りは寂しきものぞ秋夕日

あじさい日誌

11月15日 大倭神宮月次祭。

この日は上田陽向君(7歳)・朝陽君(5歳)・中島雀人君(3歳)の3人が七五三のお参りに来られました。

11月18日 静岡県浜松市の白土冬紀・由美子夫妻と松本直之さんが来邑されました。

11月18日 F I W C 関東委員会 O B で最初の韓国キャンプに参加したという井木澤稔さん(栃木県)が交流の家を拠点に

関西への旅。22日まで。
11月21日 午後、交流の家で F I W C 定例委員会。井木澤さんも参加されました。

11月23日 大倭大本宮月次祭。祭典後、教長さんは奥津齋庭で古い敷き藁のお清め。

4時から大倭会館で大倭会の幹事会が開かれました。
11月29・30日 高橋良美さん見田映子さんによって今年も奥津齋庭の新藁敷き神事が行われ、教長さんが12月6日にそのお清めをされました。

12月4日 大倭神宮で金鷄祭が行われました。

12月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会。

12月7日 大倭神宮社務所を有志の皆さんで年末の大掃除。
12月9日 今月号5・6頁のイメージ図を、編集部は奈良県宇陀市の杉本宗一さんに依頼。それを届けに来てくれました。大倭安宿苑では(菅原園)

11月16・19日 園内で作品展。(須加宮祭)

12月9日 奈良県心身障害者作品展に行きました。

新年のご挨拶を申し上げます

闘争に明け暮れ、魂魄この世に残して他界した者は、死後の世界において争いの連続である。霊界の司は人間界においてそうした心を浄化させる親心をもってこの世に出てくることを許したのであるが、ひとたび誰かの肉体に宿れば、この甚深微妙な親心をすっかり忘れて、再び過去世の悪因縁を繰り返そうと努めるようになる。

人間が生まれくる意味や行いの意味の奥深い神意について改めて考えて生きたいものですか、お互い元氣にお会いしたいものです。今年もよろしくお願ひします。

大倭七十二年 元旦

宗教法人大倭教

教長 矢追 家麻呂

紫陽花邑 邑人一同



あんない

*年始祭(大倭神宮)

1月1日(祝) 午後1時から紫陽花邑内の諸霊へご挨拶。

午後2時から大倭神宮にて。

*月次祭(大倭神宮)

1月6日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催第564回祝会

1月10日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

*大とんど

1月11日(成人の日) 午前9時30分より大本宮西の齋庭にて。

注連縄や門松等を火にあげる神事です。当日の天候により日時を変更する場合があります。

針金・プラスチック等、不燃物は必ずはずしてきて下さい。

*月次祭(大倭神宮)

1月15日(金) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮)

1月23日(土) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

当者の個人的感想を出来る限り排してきたつもりですが……。

法主さん自筆の原稿に目を通すうちに大倭大本宮(紫陽花邑)の底に流れてきた時の重さを、しつかり考えてみたいと思うようになりまして。法主さんから「味の世界やで」と言われて

(P)

編集後記

▼編集部が、法主さんの御遺稿の整理をさせていただく中で、昨年「大倭神宮伝承の紀 後編」を、今年「大倭大本宮伝承の紀」を掲載することが出来たことを素直に嬉しく思います。編集担

